

金融機関に求められる人材と な若手登用に必要な取組み

後編 地域
優秀



富士市産業支援センター・f-i-B-i-z

小出 宗昭
センター長

金融庁

遠藤 俊英
長官

金 融庁の遠藤俊英長官と富士市産業支援センター（f-i-B-i-z）の小出宗昭センター長の対談をお届けする本企画。前編では「地域金融機関の中小企業支援の現状と経営層に求められる取組み」についての話し合いを取り上げた。

後編となる今号では「人材」に関する対談をお届けする。人材に関して地域金融機関が直面している課題や、優秀な人材の集め方・活用方法、そして若い行職員のあり方について、お二人の話し合いを紹介しよう（以下、敬称略）。

「人材がいなくなると金融機関の未来もない」

かつては人気業種だった金融機関ですが、現在は不人気業種の上位に入り、採用活動も苦戦しています。この状況をお二人はどう見えていますか。

小出 金融機関の現状を見てみると、人が集まらないのは仕方なく、「ていく」という声を聞くことが多く、彼らは相当な危機意識を持っていて感じますね。金融機関は人材がすべてであり、人材がいなくなると、組織としての未来もなくなってしまう。その意味で金融機関は人材不足という極めてクリティカル（深刻）な課題に直面しているわけです。

この局面を乗り越えていくには、若い人に「この金融機関は面白い」「非常に良い仕事を任せてくれる」と感じてもらう、金融機関で働きたいと思ってもらうことが必要でしょう。

小出 同感です。金融機関で働くことそのものが「誇り」であって「喜び」であるような環境づくりが求められます。

遠藤 経営トップが、自分たちの組織で働く行職員たちに「何をしたいのか」よく聞いて、「彼らが、どうしたら充実感・やる気をもって仕事ができるか」をよく考えて実行に移すこ

がないと感じます。というのも、金融機関の行職員は入社した瞬間が一番輝いていて、その後はどんどん劣化していくように私には映るからです。

ポテンシャルが高い人材が入社しているにもかかわらず、画一的な新人研修や、過大なノルマなどでその才能を削ぎつしまし、自分たちの「箱」に押し込めてしまっている。若い人も、このような現状を見聞きしており、金融機関を敬遠するのではないのでしょうか。

遠藤 私も、地方銀行の頭取から「優秀な学生が採用できない」「優秀な人がどんどん辞め